

梅花女子大学 機関リポジトリ

恐怖管理理論における文化的世界観の測定方法に関する探索的検討

著者	福井 斉
雑誌名	梅花女子大学心理こども学部紀要
号	6
ページ	23-29
発行年	2016-03-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1306/00000052/

恐怖管理理論における文化的世界観の測定方法に関する探索的検討

An Exploratory Study on method of measuring cultural worldview in terror management theory

福井 斉

FUKUI Hitoshi

Many studies of terror management theory, had captured the cultural view of the world in only one viewpoint.. However, individuals do not have to define the self only one standard of value. Even within the same culture there is more than one standard of value, it personally would have internalized. The purpose of this study is to propose a point of view to measure the cultural worldview that becomes the foundation of self-esteem from the source of the meaning of life.

Key words: Terror Management Theory, cultural worldview, self-esteem

恐怖管理理論 (Terror Management Theory) は, Greenberg, Pyszczynski, & Solomon (1986,1991) が, Becker (1971,1973,1975) の思想を基に理論化したものあり, 社会的行動の決定因に関する包括的な理論を目指すものである。恐怖管理理論では, 人間は『死を拒絶する文化的信念システム』を発達させることで, 死にゆく運命への恐怖に対抗すると仮定している (Goldenberg, Pyszczynski, Greenberg & Solomon,2000)。死を拒絶する文化的信念システムとは, 文化によって規定される価値基準 (文化的世界観) を満たすことで世界に貢献していることを実感し (自尊感情を獲得), 死の恐怖を抑圧するというものである (Pyszczynski, Solomon & Greenberg,2003)。つまり, 恐怖管理理論では, 自尊感情やその基盤となる文化的世界観で死の恐怖に対峙するのである。

恐怖管理理論は, 心理学において様々な形で実証研究が重ねられ, 人間の行動に関する包括的な理論として多くの支持を得ている。さらに現在では, 心理学の枠組みを超えて, 宗教学や経済学など他分野においても検討され, 応用研究が行なわれている。しかし, 人間の広範囲にわたる様々な行動の生起理由を, 死ぬべき運命への気づきから生じる不安を緩和するため, 文化的世界観への信頼や自尊感情への欲求を高める結果として説明しようとするため, 各領域の研究者による様々な論議を呼び起こした。具体的には, 進化心理学的観点 (Muraven & Baumeister,1997) やソシオメーター理論 (Leary & Schreindorfer,1997), 自己決定理論 (Ryan & Deci,2004 ; Crocker & Nuer,2004), 宗教学的観点 (ムスリン,2010) ,死の不安の多様性 (福井,2009) からの観点などである (詳細は松田,1998 ; ムスリン,2010)。

本研究では, 文化的世界観の測定上の問題について述べ, その改善策として新たな視点を提案したい。

恐怖管理理論を扱う先行研究において文化的世界観は, 道徳規範 (例えば Rosenblatt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski, & Lyon,1989 ; Ochamann & Reichelt, 1994) や政治的見解 (例えば向井,2003), ステレオタイプ (例えば Schime, Simon, Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Waxmonsky, & Arndt,1999 ; 野寺・唐沢・沼崎・高林,2007) などで操作されることが多かった。しかし, 同一文化といえども文化的世界観は人によって異なる可能性は極めて高く, どのような文化的世界観をもって死の不安に対処するかについては,人によって異なる可能性が高い。しかしながら, 文化的世界観をいかに操作的に定義し, 測定するかという問題はこれまで十分に検討されてこなかった。

Solomon, Greenberg, & Pyszczynski (1991) によると、恐怖管理理論における文化的世界観は、(混沌とした) この世界に意味や秩序、安定性、予言性、永続性を与えるものと定義されている (p.97)。そして、自尊感情との関連において文化的世界観は、価値あるとその人が判断されるような価値基準をもち、その価値基準に応じて暮らしている人々に対して、永続的な場所 (不死の感覚) を与えるとされている。人が絶対的に妥当なものとして文化的価値判断基準を受け容れ、このような価値基準に応じて暮らしている生活者として自分自身を見ることで、人は意味ある世界の価値ある参加者という感覚を得るのである。つまり、文化的価値基準の妥当性を受け容れ、それを内在化し、その基準を満たすことで自尊感情が獲得されるというのである。

ここで重要なことは、文化的不安緩衝装置 (文化的世界観や自尊感情) が死の不安の緩衝効果を発揮するためには、文化的世界観が個人の中に内在化され、個々人がその基準を満たすことが必要だと考えられている点である。そこで、筆者は多様な文化的世界観を測定するための方法として、個人の人生を意味 (価値) あるものとする源泉 (人生の意味の源; sources of meaning) から文化的世界観を捉える視点を提案する。なぜならば、文化的世界観は、個人に価値あるものと認識された価値基準であることが求められ、人が何によって人生の意味を認識しているのかを測定することで自尊感情の基盤である文化的世界観の強さを測定できると考えたからである。

本研究の目的は、文化的世界観としての人生の意味の源と自尊感情との関連について実証的観点から検討し、文化的世界観の測定上の問題を改善する方法について模索することにある。

方 法

調査対象者および調査方法

調査は、関西圏に在住する大学生を対象に、2013 年 10 月～11 月と 2014 年 7 月に行なった。主に筆者が担当している講義時間を利用して学生に調査票を配布し、講義時間内に回収した。調査票には『現代人の人生観に関する調査』と題し、計 250 部を配布し、欠損が多かった者を除く 193 名 (男性 56 名、女性 137 名、平均年齢 19.92 歳、標準偏差 1.50 歳) から回答が得られた。なお、EM 推定による欠損値処理を実施した。欠損のあった分析対象者は 18 名であり、欠損の個数は 32 個であった。対象者への倫理的配慮として、学生に対して口頭で、回答拒否権が与えられていることを通知した。また、調査票の表紙には、「本調査は、現代人の人生観を明らかにするために行なうものです。回答することに抵抗がある場合は、途中で回答をやめていただいても結構です。」と表記した。

質問項目

- ・フェイス項目 ; 性別, 年齢, 調査への同意許諾
- ・自尊感情尺度 ; Rosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した 10 項目からなる自尊感情尺度を用い、「あてはまる」から「あてはまらない」までの 5 段階評定を求めた。なお、得点が高いほど、自尊感情が高いように得点化した。
- ・人生の意味の源尺度 (IMI : Important Meanings Index) ; 浦田 (2010) の人生の意味内容の分類を参考に作成した 36 項目からなる人生の意味の源尺度を用い、「重要でない」、「あまり重要でない」、「どちらとも言えない」、「少し重要」、「わりと重要」、「かなり重要」、「非常に重要」の 7 段階評定を求めた。価値研究においては、ポジティブな方向へ偏りが見られたため、Gorsuch (1970) や Braithwaite & Law (1985)

を参考に、それぞれの項目について非対称の 7 段階評定方式を用いた。なお、得点が高いほど、人生の意味の源の重要度が高いように得点化した。

結 果

尺度の構造確認

自尊感情尺度の 10 項目、人生の意味の源尺度 (IMI) の 36 項目の平均値、標準偏差を算出したところ、天井効果及び床効果を示す項目は認められなかった。

さらに、自尊感情尺度の構造を解明するために因子分析を実施した (主因子法)。固有値の減衰傾向から単因子構造が妥当と思われた (Table 1)。また、クロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .70$ という値が得られた。信頼性係数としては十分に高い値を示しており、個々の質問項目に対する回答を加算して尺度得点を算出し、事後の分析で用いた。

Table 1 自尊感情尺度の平均値、標準偏差と因子負荷量

	1	h^2	M	SD
8) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う*	-.74	.50	2.98	1.00
1) 少なくとも人並みには、価値のある人間である	.68	.48	3.17	1.00
4) 物事を人並みには、うまくやれる	.64	.39	3.26	1.06
5) 自分には、自慢できるところがあまりない*	-.62	.38	3.17	1.06
7) 自分に対して肯定的である	.60	.36	3.17	1.10
6) 色々な良い素質をもっている	.59	.37	3.05	.99
10) だいたいにおいて、自分に満足している	.53	.29	2.83	1.10
3) 敗北者だと言うことがよくある*	-.48	.30	3.16	1.09
2) 自分は全くだめな人間だと言うことがある*	-.44	.25	3.65	1.02
9) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい*	.01	.01	3.65	1.13
固有値 3.84				
寄与率(%) 38.36				

(*逆転項目)

次に、人生の意味の源尺度の構造を解明するために因子分析を実施した (主因子法、プロマックス回転)。固有値の減衰傾向や解釈のしやすさから 4 因子構造を採用した (Table 2)。

第 1 因子は、13 項目から構成されており、「普通であること」、「親密な恋愛 (夫婦) 関係を維持していくこと」、「おいしいものを食べること」など、普段の何気ない日常において見出される意味をあらわす項目が高く負荷していることから、『生活の意味 (meaning in life)』因子と命名した。

Table 2 人生の意味の源尺度 (IMI) 項目の平均値, 標準偏差と因子負荷量

	1	2	3	4	共通性	平均値	標準偏差
『生活の意味 ($\alpha = .90$)』							
33) 普通であること	0.85	-0.10	-0.34	0.14	0.57	4.49	1.78
12) 親密な恋愛(夫婦)関係を維持していくこと	0.71	-0.16	0.13	0.07	0.73	4.79	1.82
35) おいしいものを食べる	0.69	0.02	0.15	-0.10	0.72	5.35	1.57
23) 自分の限界を受け入れること	0.64	0.10	-0.24	0.31	0.60	4.19	1.71
11) 心身の健康を維持すること	0.61	0.23	-0.03	0.06	0.69	4.80	1.62
22) 友人と楽しく過ごすこと	0.60	0.37	-0.14	-0.17	0.71	5.47	1.52
36) 人と出会うこと	0.53	-0.02	0.31	-0.05	0.71	5.17	1.55
2) 家族と仲良く暮らすこと	0.53	-0.09	0.29	0.07	0.67	5.22	1.57
31) 喜びや満足を感じる	0.51	0.42	0.05	-0.26	0.80	5.23	1.56
34) 自分らしくあること	0.45	0.42	0.07	-0.02	0.75	5.42	1.50
30) 容姿をよくすること	0.43	0.00	0.40	-0.07	0.63	4.66	1.66
1) お金をたくさん稼ぐこと	0.43	-0.09	0.40	-0.14	0.55	4.82	1.63
24) お金で買えるものを所有すること	0.23	0.19	0.20	0.14	0.59	4.35	1.52
『成長志向の意味 ($\alpha = .87$)』							
7) 知識を広げて, 多くのことを理解すること	-0.11	0.72	0.35	-0.18	0.83	4.99	1.46
8) 能力や技能を身につけて成長すること	0.03	0.68	0.20	-0.08	0.83	5.02	1.44
9) 美しいもの, 芸術的なものを味わうこと	-0.13	0.67	-0.16	0.45	0.63	4.59	1.60
19) さまざまなことを体験すること	0.24	0.59	-0.04	0.07	0.67	4.82	1.62
10) 快楽を追求し, 楽しむこと	0.39	0.56	0.01	-0.05	0.79	4.95	1.55
21) 何かを創造すること	-0.09	0.50	0.01	0.46	0.70	4.23	1.68
3) 自分の潜在的な可能性を実現すること	0.08	0.43	0.33	0.13	0.80	4.63	1.54
5) 真理を見つけること	0.06	0.34	0.22	0.19	0.61	4.15	1.82
『他者志向の意味 ($\alpha = .89$)』							
17) 社会や政治に関心を持ち, 世の中をよくしていくこと	-0.13	0.03	0.66	0.28	0.67	3.62	1.66
15) 他人に対する影響力を持つこと	-0.14	0.15	0.64	0.23	0.73	4.16	1.69
26) 人の役に立ち, 奉仕すること	0.11	0.12	0.60	0.08	0.71	4.53	1.58
27) 自立して責任感を持つこと	0.26	0.13	0.53	-0.14	0.70	4.82	1.56
32) 他者から認められ, 尊敬されること	0.23	0.14	0.50	-0.03	0.70	4.49	1.66
29) 地位や名誉を手に入れること	0.02	-0.02	0.48	0.24	0.65	3.55	1.72
18) 仕事や学業にはげむこと	-0.11	0.27	0.47	0.05	0.69	4.58	1.58
4) 目標を達成するために努力すること	-0.16	0.42	0.45	0.00	0.69	4.98	1.51
14) 正義や道徳を大事にして実践すること	-0.02	0.35	0.41	0.10	0.64	4.58	1.51
25) 文化の伝統を守っていくこと	0.20	-0.02	0.39	0.39	0.72	3.78	1.60
16) 生きていることそれ自体に満足すること	-0.12	0.35	0.36	0.14	0.62	4.69	1.58
『人生の意味 ($\alpha = .77$)』							
28) 神仏を信じてその教えを守ること	-0.05	-0.12	0.17	0.74	0.71	3.09	1.84
20) スピリチュアルな次元に気づき, つながりを持つこと	-0.06	0.07	0.12	0.73	0.70	3.56	1.82
6) 自然とつながりを持つこと	0.16	0.13	0.05	0.55	0.63	4.03	1.68
13) 遺伝子を残し, 人類の存続や進化に貢献すること	0.48	-0.23	0.26	0.49	0.71	3.83	1.75
固有値	13.49	3.52	2.17	1.67			
寄与率	37.47	9.77	6.03	4.64			
	1.00	0.49	0.52	0.07			
因子間相関		1.00	0.50	0.19			
			1.00	0.30			

第2因子は, 8項目から構成されており, 「知識を広げて, 多くのことを理解すること」, 「能力や技能を身につけて成長すること」, 「美しいもの, 芸術的なものを味わうこと」など, 自己の可能性を建設的に伸ばすことに意味を見出している項目が高く負荷していることから, 『成長志向の意味』因子と命名した。

第3因子は、11項目から構成されており、「社会や政治に関心を持ち、世の中をよくしていくこと」、「他人に対する影響力を持つこと」、「人の役に立ち、奉仕すること」など、世間や他者に対する志向性が窺われる項目が高く負荷していることから、『社会志向の意味』因子と命名した。

第4因子は、4項目から構成されており、「神仏を信じてその教えを守ること」、「スピリチュアルな次元に気づき、つながりをもつこと」、「自然とつながりを持つこと」など、“生活の意味”を超え、より集会的・普遍的な意味を窺わせる項目が高く負荷していることから、『人生の意味 (meaning of life)』因子と命名した。

また、36項目からなる人生の意味の源尺度の各下位尺度について信頼性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ、『生活の意味』尺度で $\alpha = .90$ 、『成長志向の意味』尺度で $\alpha = .87$ 、『社会志向の意味』尺度で $\alpha = .89$ 、『人生の意味』尺度で $\alpha = .77$ という値が得られた。概ね信頼性係数としては十分に高い値を示しており、下位尺度別に、個々の質問項目に対する回答を加算して得点を算出し、事後の分析で用いた。

相関分析

自尊感情尺度と人生の意味の源各尺度の間の関連性をみるために相関分析を実施した (Table 3)。人生の意味の源と自尊感情の得点間に、低い正の相関が見られた ($r = .15$, $p < .05$)。これらは、人生の意味の源を重視している人は、自尊感情が高いという傾向の存在を示すものである。

Table 3 相関分析結果

	IMI	IMI_1	IMI_2	IMI_3	IMI_4
人生の意味の源尺度					
生活の意味	.86**				
成長志向の意味	.86**	.64**			
社会志向の意味	.89**	.65**	.74**		
人生の意味	.63**	.36**	.45**	.51**	
自尊感情	.15*	.10	.13	.14*	.18*

** $p < .01$, * $p < .05$

重回帰分析

人生の意味の源が自尊感情に及ぼす影響を検討するため、人生の意味の源尺度の下位尺度得点を目的変数とし、自尊感情得点を説明変数とした重回帰分析を行なった (Table 4)。その結果、『生活の意味』や『人生の意味』の重要度を高く認識するほど、自尊感情が高くなることが示唆された。

Table 4 重回帰分析結果

目的変数	説明変数	β	決定係数	F値
自尊感情	生活の意味	.25*	.41	2.85*
	成長志向の意味	.17		
	社会志向の意味	.12		
	人生の意味	.21*		

強制投入法 * $p < .05$

考 察

本研究の目的は、自尊感情の基盤となる文化的世界観の測定方法に関して、新たな視点を提案し、実証的観点から自尊感情と文化的世界観との関連を検討することであった。文化的世界観は恐怖管理理論において最重要概念の1つであるが、その測定方法については十分な議論がなされてこなかった。

恐怖管理理論では、価値あると考える文化基準において、自分がその文化的価値基準に従って生きていると感じることで得られる感情が自尊感情であるとされる(福井,2009)。つまり、文化的世界観とは、価値あるとその人が判断されるような価値基準である(Solomon & Greenberg, & Pyszczynski,1991)。恐怖管理理論における多くの先行研究では、文化的世界観を1つの視点からしか捉えていなかったが、我々は1つの価値基準によってのみ自己を規定するのではなく、同一文化内において複数存在する価値基準を内在化して、その個々の価値基準を満たしているかを判断し、自尊感情を形成していくものと思われる。すなわち、1つの文化的世界観によって自尊感情が形成されるとは言い難い。筆者は複数存在している価値基準を人生の意味の源という視点から操作的に定義し、文化的世界観としての人生の意味の源と自尊感情との関連から、その妥当性を検討した。

まず、人生の意味の源尺度の因子分析の結果、4因子が抽出された。東海圏の大学生を対象とした浦田・亀田・谷・福井・並川・榎本(2010)の調査においても、ほぼ同様の因子構造が見られたことから、因子の再現性も高く、妥当な因子構造だと思われる。

人生の意味の源が自尊感情に及ぼす影響に関する分析では、『生活の意味』や『人生の意味』の重要度を高く認識するほど、自尊感情が高くなることが示された。つまり、日常生活における意味や生涯という大局的な視点からみた人生の意味を大事にする姿勢が、自分自身を肯定する視点を高める一因となることが示唆された。また、『成長志向の意味』や『社会志向の意味』を重要視することが、自尊感情を獲得する上では影響を与えないことも示された。自己実現に向けた活動に重きを置くことは、現状の自分に満足することなく、さらなる高みを目指す求道的な姿勢のあらわれとも解釈できる。また、社会志向の意味を重要視しても、現実にはそれが達成できていなければ自尊感情の獲得にはつながらないものと思われる。すなわち、成長志向の意味や社会志向の意味は、「今・ここ」で実感するというよりも、それらの意味を実現すべく模索中のため、自尊感情とは直接的な影響がみられなかったのかもしれない。

本研究では、自尊感情の基盤とされる文化的世界観の測定方法に関して、人生の意味の源から捉える視点を提案した。生活の意味や人生の意味を重要視する姿勢が自尊感情に寄与していたことから、文化的世界観を人生の意味の源から捉えるうる可能性が示唆されたと言えよう。今後は、文化的世界観の測定方法について一層の議論が望まれる。

引 用 文 献

- Braithwaite, V. A., & Law, H. G. (1985) Structure of human values : Testing the adequacy of the Rokeach Value Survey. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49 (1) , 250-263.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995) The need to belong : Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Becker, E. (1971) *The birth and death of meaning* (2nd Ed) . New York : Free Press.
- Crocker, J., & Nuer, N. (2004) Do People Need Self-Esteem? Comment on Pyszczynski et al. (2004) .

- Psychological Bulletin, 130 (3) , 469-472.
- イーリャ ムスリン (2010) 近年の心理学理論における死と宗教 —恐怖管理理論の批判的考察— 東京大学宗教学年報, 27, 87-102.
- 福井斉 (2009) 恐怖管理理論に基づいた意味管理理論の予備的検討 (1) 関西大学社会学研究科人間科学, 72, 99-114.
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L. & Pinel, E. (1992) Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. Journal of Personality and Social Psychology, 63, 913-922.
- Gorsuch, R. L. (1970) Rokeach's approach to value systems and social compassion. Review of Religious Research, 11, 139-143.
- Leary, M. R. (2004) The Function of Self-Esteem in Terror Management Theory and Sociometer Theory : Comment on Pyszczynski et al. (2004) . Psychological Bulletin, 130, 478-482.
- 松田信樹 (2003) 恐怖管理理論研究の概要 自己心理学研究, 3, 41-53
- 向井有理子 (2003) 異文化の拒絶と受容 —恐怖管理理論の観点から— 都市文化研究, 1, 50-65.
- Muraven, M., & Baumeister, R. F. (1997) Suicide, Sex, Terror, Paralysis, and Other Pitfalls of Reductionist Self-Preservation Theory. Psychological Inquiry, 8 (1), 36-40.
- Neimeyer, R. A. (2001) Lessons of loss : A guide to coping. Philadelphia & London : Brunner Routledge.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., & Schimel, J. (2004b) Converging Toward an Integrated Theory of Self-Esteem: Reply to Crocker and Nuer (2004) , Ryan and Deci (2004) , and Leary (2004) . Psychological Bulletin, 130 (3) , 483-488.
- Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press. Ryan, R. M. & Deci, E.L. (2004) Avoiding Death or Engaging Life as Accounts of Meaning and Culture : Comment on Pyszczynski et al. (2004) .
- Psychological Bulletin, 130 (3) , 473-477. Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991) A terror management theory of social behavior : The psychological function of self-esteem and cultural worldviews. In M.P. Zanna (Ed.) , Advances in experimental social psychology. (24, pp.91-159) . San Diego, CA: Academic Press.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991) A terror management theory of social behavior : The psychological function of self-esteem and cultural worldviews. In M.P. Zanna (Ed.) , Advances in experimental social psychology. (24, pp.91-159) . San Diego, CA: Academic Press.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1997) Return of the living dead. Psychological Inquiry, 8 (1) , 59-71.
- Wicklund, R. A. (1997) Terror management accounts of other theories: Questions for the cultural worldview concept. Psychological Inquiry, 8 (1) , 54-58.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 浦田悠 (2010) 人生の意味の心理学モデルの構成—人生観への統合的アプローチにむけて— 質的心理学研究, 9, 42-68.
- 浦田悠・亀田研・谷伊織・福井斉・並川努・榎本博明 (2010) 人生の意味の源に関する尺度項目の構成 —Important Meanings Index (IMI) の構成に向けて— 第13回自己心理学ワークショップ発表論文集, 4-11.